

## 大賞

# ミャンマーを国際社会に復帰させ、民主化への道筋をつけた開国の父

## テイン・セイン 前ミャンマー連邦共和国大統領

### 〈プロフィール〉

1945年旧イギリス領ビルマ（現ミャンマー）パテイン郡生まれ。前ミャンマー連邦共和国大統領。1963年に陸軍入隊。1967年国軍士官学校卒業。1997年に国家平和開発評議会（SPDC）委員に就任。2007年に暫定首相を経て首相に就任し、大将に昇格。2010年4月に軍を退役し、首相職のまま、連邦連帯開発党（USDP）を結成し、党首に就任。2010年11月下院（国民代表院）議員選挙にて当選後2011年3月に23年ぶりの大統領に就任。経済社会改革を推進し、軍政から民政への移行期のミャンマーを改革開放路線へと転換させた。総選挙を経て2016年3月に大統領を退任。現在USDP中央指導委員会議長。



### 〈受賞理由〉

テイン・セイン氏は、2011年の大統領就任以降、市場志向の経済改革をはじめとした諸改革を通じてミャンマーを開放的で民主的かつ繁栄する国家へと作り変えることに尽力した。行政・政治改革に着手する一方で、テイン・セイン政権は、国民の安全な生活を確保し、雇用機会を創出し、生活水準と一般市民の社会的・経済的地位を向上させるため、社会志向の広範な経済改革も採用した。広範な教育改革にも着手し、小学校と中学校教育の無償化が実現した。

氏の政府は、各政策課題に対して多焦点的アプローチを採用し、そのような取り組みの中で特筆すべきは経済社会改革（FESR）の枠組みである。FESRにおいて選定された優先項目の中でとりわけ、マクロ経済の安定と外国投資の制限緩和を確実にする金融政策と為替レートの改革は重要な改革であった。またFESRを通じ外国投資に関する法整備を進めて外国人投資家のための投資環境の改善に努めた。こうした改革のおかげで、欧米の経済制裁が緩和、または解除され、援助国がミャンマーの政治的、経済的な移行をより強力にサポートすることが可能になった。

前大統領のもっとも大きな成果の一つは2014年に初めてASEAN議長国となり、この地域全体のリーダーシップを発揮したときである。長らく閉鎖的な環境に鑑みれば、各種サミットや閣僚会合等を滞りなくやり遂げただけでも大変な功績であるが、この年のサミットで採択されたネピドー宣言は、その翌年採択されるASEAN共同体ビジョン2025策定に向けて重要な骨格を示した。

議長国としての成功はミャンマーの人々に自信を持てる結果を生み出し、ミャンマーが開放的で地域や世界規模の課題に取り組んでいけることを示した。

テイン・セイン氏の内外への関心とリーダーシップが、第3回アジアコスモポリタン賞の大賞を授与するにもっとも相応しい人物たらしめるものである。